

フィールドワークの試行錯誤*

三浦 弘[†]

【要旨】 音声学のフィールドワークには3つの過程がある。(1) どのようにして適切な被験者を見つけ出し、最適な音声を録音するか、(2) 収録した音声の分析（特に音響的分析）と図表の作成、(3) 分析結果からの音声・音韻の考察である。本稿は(1)にテーマを絞った実地踏査のための方法論である。(2)と(3)には多数の参考文献があるが、(1)については資料が少ないからである。最も大切なことは現地の研究協力者を確保することだと言える。大学や研究所に協力を依頼すると理解が得られやすく、録音施設までも借りられることがあるので、高音質な録音ができる。しかし、被験者が学生や大学関係者だけになってしまうことが多く、基層方言（basilect, 労働者階級の地域方言）はなかなか収録できない。そこで公的機関等へ協力を依頼することになるが、現地にコーディネーターとしての協力者がいるとスムーズに交渉が進む。まだ模索中ではあるが、ようやく形成されてきた(1)の方法について自らの試行錯誤を報告する。

キーワード： 英語方言、社会音声学、語彙リスト、キャリア文、研究協力者

1. はじめに

10年前、2006年の夏にアイルランド各地で初めて英語方言の現地収録を行った。その時はウォーキング・ツアーのガイドやバス・ドライバーにインタビューをした程度だったので、体系的な分析ができなかった。2009年夏には英語発達史研究の一環としてビデオカメラをもって、オランダ・レーウワルデン（Leeuwarden）で西フリジア語、ドイツ・ブレートシュテット

（Bredstedt）で北フリジア語の収録を行った（フリジア語は英語に最も近い西ゲルマン語系言語）。現地の研究所の図書室でフリジア語学の資料を探し、その場で語彙リストを作成し収録に臨んだ。正にオン・デマンド、手探りのフィールドワークだった。

2011年からは入念に事前準備を行い、6年連続で毎夏数地点ずつ、イギリス（スコットランド、ウェールズ、コーンウォール）とアイルランド各地のケルト語の影響を受けた英語方言の現状を収録し、反方言化（標準語化）の進行度合と新しい変異傾向を分析してきた。英語方言の収録では特殊な異音（例えば、ダブリン英語の slit-T）を除いては、唇の形状を撮影せずに、音声のみの収録としている。大学の音声録音室をお借りした場合には、録音機器も借用し、被験者の自宅等では、2台のICレコーダーによる録音とした。

*本稿は日本英語音声学会（EPSJ）第21回全国大会（2016年11月20日、早稲田大学）におけるシンポジウム「英語音声研究とデータの活用」の中でパネリストとして口頭発表した内容に加筆したものである。また、本研究は文部科学省私立大学学術研究高度化推進事業オープン・リサーチ・センター整備事業：研究プロジェクト名：「Anglo-Saxon 語の継承と変容」（平成17～21年度）、及びJSPS科研費JP23520593（平成23～25年度）、JP26370574（平成26～28年度）の助成を受けたものである。

[†]専修大学文学部

本稿では、音読用語彙リストとの関連から、まず、英語方言調査に音声科学的手法が取り入れられるようになった経緯を概観し、その後、英語方言研究のためのフィールドワークにおけるこれまでの独自の試行錯誤を整理する。本稿は異音相違や言語接触による変異等の考察ではなく、あくまでも今後のフィールドワークのための参考資料としての報告である。

2. 英語方言調査の手法

2.1 従来の方言音声調査

発音変種 (accent) を研究する「方言学」(dialectology) の研究は、音声学よりも「社会言語学」(sociolinguistics) の領域に属するとみなされる傾向があるが、その理由は音声科学的な分析があまり行われてこなかったためである。

英国での本格的な方言研究は 1950 年代に遡る。当時リーズ大学教授であった Harold Orton のグループが 11 年かけて調査した the Survey of English Dialects (SED) である (Orton et al. 1962-69)。語彙と文法と音声に関する調査であったが、音声については、調査員の聴覚印象に基づく、発音記号による書き取りであった。発音変種の研究ではこの伝統が長年受け継がれてきた。

2.2 社会音声学

最近では一層音声学的な「社会音声学」(sociophonetics) という新しい領域が認められ始めた。それは方言研究を音声科学的な手法を用いて行う研究である。Thomas (2011) が出版され、このような研究が国外では徐々に増えつつある。

社会音声学という研究領域が確立する以前の研究で、社会音声学的なアプローチのきっかけとなった著作は Foulkes and Docherty (1999) である。それは英語方言学の最重要基本文献となった Wells (1982) において母音の比較のために考案された「標準語彙セット」(SLS, standard lexical sets) を採用して、その共通の語彙リストに基づいて収録した音声を音響的に分析して、比較考察したものである。SLS はその後、英語方言学の標準的な指標となった。

3. 試行錯誤の過程

3.1 調査方言と被験者募集方法

6 回の調査方言は(1)の通りである。音声の収録場所が大学である場合は、括弧内に大学名を記す。

- (1) 2011 年 スコットランド・グラスゴー (グラスゴー大学)
- 2012 年 スコットランド・オークニー諸島 (ハイランズ・アンド・アイランズ大学)
- スコットランド・シェトランド諸島
- スコットランド・アバディーン (アバディーン大学)
- 2013 年 スコットランド・グラスゴー (ニューキャッスルのノーサンブリア大学)
- スコットランド・エディンバラ (クイーン・マーガレット大学)
- 2014 年 ウェールズ・ポンティプリーズ
- ウェールズ・カーディフ
- ウェールズ・ペンブルック

2015年 アイルランド・ダブリン（ダブリン大学）

アイルランド・キラニー

2016年 コーンウォール・ルー

コーンウォール・トゥルロー

コーンウォール・ヒームア

コーンウォール・マウズル

大学の録音室での収録の場合には、たいていの被験者はその大学の学生か教職員となるので、地域方言の特徴は維持されていても、訛りの強い基層方言とは言えなかった。2012年のオークニー諸島での調査では、現地にあるハイランズ・アンド・アイランズ大学ノルディック研究センターの研究者がオークニー方言研究用に開設しているフェイスブックで被験者の募集をしてくれたために、地元住民の発音が収録できた。シェトランド諸島でも、現地のシェトランド方言保存会会員の協力が得られた。

2014年のウェールズ南部での調査では、地元出身の友人が協力してくれたので、基層方言が収録できた。彼はポンティプリーズ出身であるために、ポンティプリーズでは彼の親戚や、友人の親類の高齢者に事前に録音日時の調整をしてもらい、被験者の自宅を回って収録した。カーディフとペンブルックでは、彼と一緒にローン・ボーリング場、パブ、労働者の社交クラブ、スポーツ施設、図書館等の公共施設を回って地元出身の被験者を探したが、事前予約が無いとなかなか難しいことを実感した。2015年のアイルランドでは、ダブリン方言はダブリン大学の協力を得られた。南部キラニーでは、一人で観光馬車乗り場（車夫）や公共施設や公園で被験者を探したが、被験者が語彙リストの文字を読めなかったり、バスに乗り遅れたと言って、追加の謝金を要求されたりして苦労した。

2016年のコーンウォールでの調査では、これまでで最もスムーズに最適な被験者を集めて収録することができた。その理由はコーディネーター（現地の研究協力者）が得られたためである。コーディネーターの重要性と併せて、2016年の募集方法は下記3.5節で述べる。

3.2 語彙リスト

語彙リストの作成である。すべての英語方言共通の「標準語彙セット」(SLS)に加えて、目的の方言の特徴を導きやすい語彙を選択する必要がある。先行研究を探し、予測も含めて語彙を選択し、さらに、リストの中にできるだけミニマル・ペアを散りばめておくと分析が容易になる。表1は語彙リストの一部で、毎回使っているSLSの箇所(Group B)である。73語あるので、5つの録音ファイルに分けるために、5つに区切って(B1~B5)録音している。

調査方言ごとに作成している箇所(Group A)には、例えば、スコットランド方言では標準英語とは異なり、有声破裂音(軟音)の前の母音の持続時間が長くない、という先行研究があれば、*ride*と*right*のようなミニマル・ペアを複数考えて、リストの中の少し離れた位置に加えておく。ウェールズではケルト系言語の現在の発音がわかるように、特徴ある地名を加える。

今後はGroup Aにはターゲットが子音である語も含めることにしたいと思っている。例えば、次回予定している、イングランド北部方言の調査では、リバプール方言であれば、歯摩擦音が歯音化された歯茎音になるので、*three*と*tree*のペアを加えて録音しておき、差異の程度を音響的に分析することになる。

表 1：標準語彙セット（語彙リスト内 Group B）

<Group B> Vertically <From the standard lexical sets for <i>Urban Voices</i> (1999)>				
B1	B2	B3	B4	B5
KIT	FLEECE	CHOICE	COMMA	TREACLE
DRESS	FACE	MOUTH	FREE	SING
HEAD	STAY	POWER	METER	GOING
NEVER	MEAT	NEAR	FATAL	BEETLE
TRAP	PALM	BEER	EIGHTY-EIGHT	THRONE
LOT	THOUGHT	SQUARE	CARTER	BEAGLE
STRUT	GOAT	START	DAUGHTER	ROLLS
ONE	GOAL	BIRTH	FREES	NOTHING
FOOT	MORE	BERTH	EITHER	WITH
BATH	GOOSE	NORTH	OLD	US
AFTER	GHOUL	FORCE	BRILLIANT	NEITHER
DANCE	BOOK	CURE	FREEZE	TUESDAY
CLOTH	PRICE	HAPPY	CLEAN	
NURSE	PRIZE	LETTER	THROAT	
GIRL	FIRE	HORSES	GLEAM	

3.3 キャリア文

語彙リストを音読してもらう際には、キャリア文を使わないと音声環境が統一できない。キャリア文の設定も容易ではない。ターゲット語に音調核が来るようなキャリア文を設定する。しかし、それが大変難しい。2011年から2013年の調査では、(2)のキャリア文を使用した。

- (2) I said _____, again.
- (3) I said _____, then.
- (4) Say _____, please.

(2)のように、ターゲット語の後に母音で始まる語を使うと、ターゲット語末の子音との連結が生じてしまう。

2014年の調査では、(3)を使うことにした。しかし、4、5人の被験者の収録の後、すぐに(4)に変更した。ターゲット語の後に摩擦音で始まる語を置くと、イントネーションが乱れやすくなることがわかったからである。ターゲット語に音調核が来るような最適なキャリア文は今も模索中であるが、2014年以降の調査では(4)を使用している。

- (5) Now repeat _____, please.

Schützler (2015: 164)の研究では、(5)が使われているが、キャリア文はできる限り短い方がよい。被験者にはすべての語をキャリア文に入れて2回ずつ音読してもらう（分析には2回目の音声を使用）。Group AとGroup Bを併せると録音語数は、例年130語程度になるので、語彙リストの音読だけでも約40分かかるからである。

3.4 その他の注意点

音読用語彙リストに加えて、(6) のような英文 7、8 文を 2 回ずつ音読していただくことにしている。(6) の出典は Collins and Mees (2013: 75) である。

(6) Lesley told Paul to clean the children's playroom.

この文からは、その方言の L の異音分布がわかる。特に子音の調査については、このような音読用英文を用意している。

録音の最後は、インタビューと被験者との 4~5 分の自由会話（自然発話）、あるいはモノログ（単独発話）となる。その方言のイントネーション体系における音調（tone）の形式と種類、そして機能（Yes-no 疑問文にはどのような音調を使用しているか等）がわかる。分析時に完全なスクリプトがあると考察しやすいので、対象方言の知識のある英語母語話者に文字起こし（スクリプト作成）を依頼する。

「質問票（個人情報記入用紙）」（proforma）には、年齢や出身地のみならず、できるだけ多くの個人情報（現在に至るまでの居住地や職業遍歴、両親の出身地等）を被験者に記入してもらおうと、考察の際に非常に参考になることがある。しかし、個人情報の取り扱いには注意しなければならない。

録音時には、バックアップのためのセカンド・レコーダーを必ず用意する必要がある。録音ファイルをセクションごとに分割していると、時には録音ボタンが押されていないということがある（過去に 2 回経験）。また、大学のような録音室以外での録音の時には、高音質の音声を収録するためには、メイン・レコーダーに高性能のコンデンサ・マイクロフォン（ダイナミック・マイクロフォンではなく、コンデンサ・マイクロフォンの重要性については平坂（2009: 46-47）を参照）をプラグ・インする必要がある。録音機材は飛行機に搭乗する際には、機内持ち込みにしなければならないが、とても嵩張ることが難点である。2012 年にオークニー諸島からシェトランド諸島に飛んだときには、小さい飛行機で持ち込みが許されず、タラップの下に置いていくように指示されたが、到着地でもタラップの下に用意されていた。

3.5 コーディネーターの重要性

学術目的であっても、地球の裏側から遣って来た一研究者の個人研究では、国立国語研究所が約 20 年毎に行っている山形県鶴岡市における言語実態調査のように、市役所から住民基本台帳の提供が受けられるわけではない。現地の（イギリス人の）音声学研究者に、地元住民から被験者を募集する際のコーディネーターとして協力していただくことが不可欠であると思うようになった。公共機関や団体等への事前交渉、及び数日間（場合によっては一週間以上）の調査に同行していただく。そのためにはもちろん、適切な金額の謝金が必要である。

2016 年のコーンウォール地方の調査では、まず、ご定年後にペンザンスに在住している、ロンドン大学の恩師、John Maidment 先生にメールで相談した。コーンウォールでは「王立英国在郷軍人会」（RBL, the Royal British Legion）の各町の支部活動が活発であるから、RBL に協力を依頼するとよいとのアドバイスをいただいた。そこで自分で RBL へ国際電話をかけたが、交渉の窓口となる担当部署を聞き出すだけで 20 分以上もかかったので、2014 年のウェールズ方言調査でお世話になった友人、Paul Carley 氏にコーディネートをお願いすることにした。彼の承

諾を得てから、筆者は RBL コーンウォール本部福利厚生課の担当官へ、勤務校のレターヘッド便箋に研究目的、録音方法、謝金金額等を記載し、研究成果公開に関して人権を侵害しない旨の誓約書も付けて郵送した。その後の各支部との電話やメールによる交渉はすべてコーディネーターに任せ、4 支部（ルー、トゥルロー、ヒームア、マウズル）から併せて 12 名の適切な被験者の提供が受けられた。コーディネーターには、自然発話を収録するときにも、インタビュアーを務めていただいた。インタビュアーがイギリス人であることも重要である。インタビュアーが東洋人の顔をしていると、被験者は無意識のうちに、わかりやすく話そうとしてしまい、標準語に近い話し方をしてしまう傾向があるからである。

4. おわりに

フィールドワークには苦勞が多いが、データを分析すれば必ず新発見があるからやり甲斐がある。イギリス人の音声学等イギリスの英語方言についての記述はほぼ完了していると思われるかもしれないが、フィールドワークをすれば新しい変異が見つかるものである。また、大変だと言いながらも、実はフィールドワークの過程で、被験者との会話にはこのうえ無く楽しいものがある。パブで地元の人たちと会話しても、すぐにはあまり深い話ができないが、収録の間には、被験者が調査員を信用してくれると、方言のみならず、さまざまな情報を提供してくれる。その会話が本当に楽しい。今年の RBL の支部仲介者もほとんどがボランティアの方々に専門職の方もいた。被験者の中には、ルー市の市長さんまで来てくれた（謝金は RBL へ寄付）。漁師、船頭、道路清掃員、煙突掃除人、窓ふき業者、コック、彼らとの会話こそ、現在の私の趣味と言える。

【参考文献】

- Collins, Beverley and Mees, Inger M. (2013) *Practical phonetics and phonology: a resource book for students* (3rd ed.). London: Routledge.
- Foulkes, Paul and Docherty, Gerard (Eds.) (1999) *Urban voices: accent studies in the British Isles*. London: Arnold.
- 平坂文男 (2009) 『実験音声学のための音声分析』 関東学院大学出版会
- 城生佰太郎 (2008) 『実験音声学入門』 サン・エデュケーショナル
- 城生佰太郎 (2015) 「実験言語学序説」『実験音声学・言語学研究』 7 : 1-43.
- Ladefoged, Peter (2003) *Phonetic data analysis: an introduction to fieldwork and instrumental techniques*. Oxford: Blackwell.
- 三浦弘 (2010a) 「北・西フリジア語の短母音と長母音—その音響的分布と唇の形状」『ことばの普遍と変容』 5 : 129-141.
- 三浦弘 (2010b) 「フリジア諸語の二重母音と英語の変容」『専修人文論集』 87 : 25-35.
- 三浦弘 (2011) Frisian monophthongs and English vowel change 『英語音声学』 14/15 : 160-167.
- 三浦弘 (2012) 「スコットランド標準英語の句末音調 Mid—Mid-Level の多用と Mid-Fall の実在」『英語音声学』 17 : 57-62.
- 三浦弘 (2013a) 「スコットランド英語母音の地域変異—現地録音と音響ダイアグラムに基づく考察」『専修人文論集』 93 : 55-75.

- 三浦弘 (2013b) 「スコットランド英語における二重母音の異音相違」『英語音声学』18 : 177-187.
- 三浦弘 (2014) 「グラスゴー英語の音調と ToBI 表記法」『英語音声学』19 : 97-105.
- 三浦弘 (2015a) Phonemic variations in South Wales English vowels 『専修人文論集』97 : 141-160.
- 三浦弘 (2015b) 「ウェールズ南部英語における TRAP-BATH-PALM 母音の社会言語学的変異」『英語教育音声学と応用実践研究』(日本英語音声学会中部支部 学術論文集 第4号) : 31-40.
- 三浦弘 (2016a) 「ウェールズ英語における対比二重母音/ɪu/の後退」『英語音声学』20 : 43-53.
- 三浦弘 (2016b) 「スコットランド英語の二重母音における母音長規則とフォルマント推移の型」『専修人文論集』98 : 237-267.
- 三浦弘・勝田浩令 (2014) 「スコットランド英語二重母音のフォルマント軌道変遷に基づく地域変異の考察」『特殊教育音声学と関連領域研究』(日本英語音声学会中部支部学術論文集 第3号) : 17-29.
- Orton, Harold et al. (1962-69) *Survey of English dialects* (4 vols). Leeds: E. J. Arnold.
- Schützler, Ole (2015) *A sociophonetic approach to Scottish Standard English*. Amsterdam: John Benjamins.
- Thomas, Erik R. (2011) *Sociophonetics: an introduction*. Basingstoke: Palgrave Macmillan.
- Wells, J. C. (1982) *Accents of English* (3 vols). Cambridge: Cambridge University Press.

English phonetic fieldwork by trial and error

Hiroshi MIURA[†]

The practical experience of the present writer's own English phonetic fieldwork which has been carried out for six years in Great Britain and Ireland is reported. The processes of trial and error for finding subjects, selecting words for the recording word lists, designing contents of the proforma and things to note on the recordings are included. This paper shows that phoneticians can still discover new things if they are willing to do the fieldwork, and that the secret of success to the fieldwork is getting hold of a reliable indigenous cooperator in the field.

[†]*School of Letters*

Senshu University

2-1-1 Higashimita, Tama-ku, Kawasaki 214-8580, Japan

E-mail: gloss1013@gmail.com